

## 女子大学生から女子高校生へのピア・メンタリングを導入した キャリア教育プログラムの実践

伊藤 嘉奈子 (子ども心理学科・教授)

### 1. はじめに

筆者は、女子大学生から女子高校生へのピア・メンタリングを導入したキャリア教育プログラムの実践について研究を行っている。本研究については、2016年7月に開催された鎌倉女子大学学術研究所主催第30回講演会にて研究に至ったきっかけや研究計画などについて講演し、2017年3月に発行された鎌倉女子大学学術研究所報第17巻の学術研究所主催講演会記録「イギリスの学校臨床心理の実践と教育心理士養成について」としてまとめた。そして、実際に実践した時の様子について、2019年3月に発行された鎌倉女子大学「緑苑」第53号の「学園のWA 大学⇔高等部 ピア・メンタリング活動」にて報告し、この活動に参加していた学生の感想をいくつか示した。しかし、紙面上の都合により、研究の背景や実際の調査についてすべてを記述することはできなかつたため、今まで書ききれなかつた部分を本稿で述べていきたい。

### 2. 研究の背景

#### (1) キャリア教育実践

筆者は、教育現場の先生方とともに、キャリア教育の実践研究を行ってきた。例えば、中学1年生を対象としたキャリア教育の実践研究がある(伊藤・工藤, 2010)。職業知識と意識の向上を図ることが目標である「キャリアガイダンス」の授業において、単なる「職業調べ」を実施して終わっている授業が多いことが先行研究にて明らかになったため、筆者らは、各自が希望する職業をコラージュで表現し、その作品を基にしてグループで職業に関する話し合いをするという単発プログラムを試みた。事前事後で質問紙を実施した結果、進路に関する意識や意欲の向上が見られた。そして、この結果がコラージュ作成とグループでのワークによる効果かどうかの検証が今後の課題となった。続いて、伊藤・工藤(2011, 2012a, 2012b)では、中学3年生と高校1年生を対象としたキャリア教育の実践研究を行った。特に、高校1年生には、中学の3年間継続して受けてきたキャリア教育に関する生徒の意見を質問紙法および面接法にて分析した。これらの研究の結果、グループ・ワークがキャリア教育を促進することが明らかとなった。ただし、授業については、1回限りの単発の実施であり、キャリア教育の目標の一つに挙げられる「職業的進路成熟態度」は、一度きりの授業で変化がみられるものではないと考えられ、長期間にわたる継続プログラムの実施による検討の必要性が課題となった。これらの課題を踏まえ、新しい視点を入れたキャリア教育に関するプログラムの開発、かつ、長期にわたる継続プログラムの検討を行った。

## (2) Psychology Mentoring Project

筆者は、2016年に England にある Royal Holloway University of London で行われていた Alana James 先生による Psychology Mentoring Project を視察する機会を得ることができた。具体的な内容は、伊藤 (2017) にまとめたとおりである。このメンタリング・プロジェクトは、心理学科に所属する大学生が高校生に対して、大学の現実と理想の意識化や、大学で学ぶことの意義、大学での心理学の講義内容等について情報提供し、キャリア形成を支える活動であり、入学後に初めて現実に直面し、不適応を起こす学生が数多くいるとの現状から実施されたものであった。そして、高校生のキャリア形成の向上のみならず、大学生の自己効力感やキャリア形成を促進する効果が得られていた。

イギリス同様、日本では、大学生が入学後に理想と現実のギャップを感じるミスマッチが増加しており、高大連携プログラムでの支援の重要性が示唆される。そこで、欧米のキャリア支援プログラムをそのまま導入するのではなく、日本の現状に合わせて改良し、大学生が高校生に心理的サポートを行いながら、キャリア形成を共に考えるという協働作業という観点から成るプログラムを開発することに意義があると考えられる。

以上より、本研究では、高校と大学の移行期の適応に焦点をあて、大学で学ぶということ、高校と大学の違い、将来のキャリアと大学での学びの意義などについて取り上げ、大学進学におけるキャリア発達の支援プログラムの開発を試みることにした。大学進学後に理想と現実のギャップに気づき、不適応に至るようなケースを防ぎ、高校から大学への移行期のより良い適応を支援するためにも、ピア・メンタリングの有効性が示唆された。

## (3) メンタリング

メンタリングの定義は定まったものはない。例えば、久本 (1999) は、メンタリングとは「知識や経験の豊かな人々 (=メンター) がまだ未熟な人々 (=プロテジェ) のキャリア形成と心理・社会的側面に対して一定期間継続して支援を行うこと」と定義される概念と述べている。渡辺 (2018) は、「成熟した年長のメンター (mentor) と若手のメンティ (mentee または protégé) とが基本的に一対一で継続的・定期的に交流し、役割モデルと信頼関係の構築を通じて発達支援を行う関係性」を意味すると述べている。いずれにしても、経験豊富で成熟した人というメンターが、今はまだ若手であり、これから成熟していく人というメンティまたはプロテジェに対して、継続的に支援を実施することといえよう。本研究では、渡辺 (2018) の定義を用いることとし、メンターとメンティの語句を用いることにする。

また、Kram (1985) によれば、メンタリングには、「キャリア的機能」と「心理・社会的機能」の2つの機能があるという。キャリア機能とは、「プロテジェのキャリア発達を促進・向上させるための行動」であり、スポンサーシップ、推薦・可視性、訓練、保護、仕事への挑戦性の向上という下位概念によって構成される。一方、心理・社会的機能とは、「プロテジェに対して、能力の意味、明確なアイデンティティ、社会や企業における役割についての考えを深め向上させるための行動」であり、役割モデル、容認・確認、カウンセリング、友好という下位概念から構成される。

久本 (1999) は、これらのメンタリング機能を踏まえた上で、メンタリングの主目的とは、一個人のキャリアの向上のために、キャリア面と心理・社会面の両側面から支援を行

うことにあると述べている。それゆえに、リーダーシップやソーシャル・サポートとは一線を画す概念であるとし、ソーシャル・サポートとメンタリングとの違いについて明確に述べている。筆者の研究においても、ピア・サポートとの違いはこの点にあると考える。

#### (4) メンタリングに関する先行研究

メンタリングに関する文献レビューを行った久村(1997)によると、先行研究の多くが経営組織におけるメンタリングに関するものであり、その効果研究は、各研究ごとに相反する結果が報告されているものもあると指摘している。また、先行研究の多くがアメリカの経営組織を舞台として展開されているという点から、日本へのメンタリング・プログラムの導入には、さらなる実証的研究の必要があると示唆している。

近年、看護の分野での研究も増えてきており、メンターの存在が、メンティに「職務満足感」「成熟性の促進」などキャリア発達の促進につながることや(妹尾・三木, 2012)、メンタリングを受けているメンティは、キャリア目標意識すなわち、個人のキャリア目標に対する認知的、情緒的、行動的側面における関与意識が高い傾向がみられる(菊池, 2001)ということが明らかとなっている。さらに、新人期看護師を対象とした研究も増えており(古川・細田, 2022など)、メンタリングの重要性が指摘されている。

では、教育分野でのメンタリング研究の動向はどのようなものか。例えば、幼稚園実習におけるメンタリング機能に関する研究(浅田, 2007)や、初任教师へのメンタリングにおいて複数のメンターが果たす機能に関する研究(島田, 2013)や、メンターといえる存在がいることが自身の授業実践や児童生徒とのかかわりに促進的な働きをすることが明らかとなった研究(森本・高橋, 2022)など、教師と実習生、あるいは、ベテラン教師と初任教师でのメンタリングに関する実証的研究があるが、まだ研究は少ないのが現状である。

#### (5) ピア・メンタリングに関する先行研究

ピア(peer)とは、年齢・地位・能力などが同等の者、同僚、同輩、仲間という意味である。ゆえに、ピア・メンタリングとは、メンタリングをピアで実施することである。

一般的に広く知れ渡っていると思われる「ピア・サポート」は、今日、広く日本の学校教育に導入される傾向にあり、研究も盛んである。一方のピア・メンタリングはわずかな研究しかなくされていない。渡辺(2016)によると、欧米においては、ピア・サポートも、ピア・メンタリングも広く活用されている。しかし、日本では、専門職養成や企業の人材育成以外の青少年向けメンタリング・プログラムはほとんど拡大していないと述べている。

児童・生徒同士によるピア・メンタリングに関する研究を検索すると、非常に研究が少ない。その中で、渡辺(2003, 2016)は、青少年向けのメンタリング・プログラムについて研究を重ねている。これらの研究では、高校生が近隣の小・中学生のメンターとして、身体活動やボードゲームをしたり、一般的な話し合いをしたりして、交流し学業以外の面に関する支援を行うという、アメリカの青少年向けピア・メンタリング・プログラムについて、日本への導入の可能性を検討している。また、渡辺(2018)では、メンタリング・プログラムについて、海外と日本の状況を比較し、「先進」各国においては、青少年向けメンタリング・プログラムが普及拡大しているが、日本では、メンタルフレンドなどというようなメンタリングに類似した個別支援プログラムは存在するもののメンタリング・プ

プログラムの基本構造を備えたものはほとんど存在せず、日本での青少年育成のためのメンタリング・プログラムは未発達と言わざるを得ないと述べている。そして、メンタリング・プログラムが備えるべきプログラム評価が十分に意識されていないことも指摘している。このような中、広島市で、青少年支援メンター制度という、日本での先駆的事例といえる青少年向けメンタリング・プログラムが実施されていることを紹介している。そして、プログラム評価とその結果に基づく改良の重要性が述べられている。今後の発展・拡大が期待されよう。

その他に、桜井（2014）が、大学生メンターが中学生に対してメンタリングを行った実践研究がある。大学生メンターの活動は、学習の補助、休み時間に生徒の話を聞く、生徒の雑談を聞くなどであった。そして、適切な心理的距離を保ち、生徒を批判しないで話をよく聴くことなどを注意していたということが明らかとなった。また、大学生メンターは、自分の行為が中学生に与えている影響について推察するのがまだ困難なようであるため、スーパービジョンを受けることが重要であることが示唆された。

田中・喜多・河野・末廣・洲崎・高梨・高橋・能勢（2021）は、中学生・高校生が大学生メンターのサポートを受けながら宇宙線の探究活動を行い、中高生主体の共同研究の構築を目的とした研究を行っている。その中で、中高生と研究者との間に大学生などがメンターとして媒介することで、一方的に教えるような形ではなく、一緒に考えながら探究をしているという意識づけがなされていることが中高生の主体的な探究活動の背景にある重要な要素の一つと考えられるとしている。また、Zoom や Slack というような、オンラインツールが、科学技術コミュニケーションに有益である面も述べられている。

以上より、日本では児童・生徒を対象としたピア・メンタリングのプログラムは非常にわずかである。また、メンタリングとキャリアを関連付けた実践研究も、児童・生徒を対象とした研究については今のところ、見られなかった。

#### （6）高校と大学の移行期、高大連携

高校において職業や進路を吟味した上で大学に進学したものの、入学後に不適應や退学に至る学生が増加していると言われている。そのため、高校と大学の移行期の円滑な接続を促すために高大連携が重要であり、高校生と大学生両者のキャリア発達を支援するための連携として捉えなおす必要が示唆されている（田村・桃井，2013）。現行では、大学教員による出張授業など様々な取り組みがなされているものの、単発の取り組みであることが多く、高校生のキャリア形成における悩みや迷いといった心理面へのサポートを含んだ取り組みはなされてこなかった。

現在、大学の入試形態は様々である。その結果、かなり早い時期に合格通知を得ることができ、その後はあまり勉強をせずに大学入学の日を迎え、その後、大学の授業についていくことが困難となるケースも考えられよう。また、学部学科の選択についても、あまり熟考せず、自分の学力で入れる学部学科に入るケースや、特定の職業へのあこがれを抱いて入学したが、そのあこがれと現実のギャップに入学後に気づき、苦しむというようなケースも考えられる。これらのミスマッチを防ぐためにも、入学前のキャリア支援が重要と考える。

### 3. 目的

以上を踏まえて、本研究では、女子大学生がメンターとなり、女子高校生に対して、キャリア発達への支援を行うという、異年齢間でのピア・メンタリングについて実践研究を行うことを目的とした。特に、メンタリングの活動内容をキャリア支援に焦点を絞ることとし、高校の授業で実施するキャリア教育場面におけるメンタリングを取り上げ、その効果を実証的に研究する。また、本研究では、特定の学部・学科での学び・キャリアということに特化せず、全般的な内容、すなわち、大学で学ぶということ、高校と大学の違い、将来のキャリアと大学での学びの意義について取り扱うこととする。そうして、高校と大学の移行期の適応に焦点を当て、大学進学におけるキャリア支援を実施することを目的とした。

### 4. 方法

本稿では、緑苑第53号に記載した、2017年度に行った実践研究について述べる。結果は、今まで使用していないデータを使用して示す。なお、本研究については、鎌倉女子大学倫理委員会の審査を受け、承認を得ている（鎌倫-16015）。

#### （1）大学生メンターへの研修

まず、実践を行うにあたり、メンターとしての参加を希望した大学生7名に対して筆者がピア・メンタリングに関する研修を行った。その際に、研修内容の理解を促すような資料を提示したいと考えていたが、海外のものしか見当たらなかった。そこで、筆者とメンター学生7名で、The Mentoring Partnership of Southwestern PAがWeb上で公開している「Mentoring Partnership's Peer Mentor Handbook」を、半年間かけて訳し、ハンドブックを作成することから始めた。作成した「ピア・メンター・ハンドブック」をFigure 1に示す。

全22ページからなり、内容はTable 1に示すとおりである。ピア・メンタリングの定義や目的、効果をはじめ、メンターの役割と機能、そして、信頼関係の構築の重要性と留意点、カウンセリングで用いられるような傾聴や応答の技法、さらに、メンタリング中の難しい質問などへの対応と留意点、メンタリング活動の最終目標について具体的な内容が盛り込まれている。

そして、このハンドブックを用いて、筆者が学生メンターに対して、ピア・メンターとしての役割や活動内容について講義形式での研修を行い、さらに、傾聴や応答などについての演習を実施した。

#### （2）対象者および実践の概要

高校3年生20名（本研究への参加を希望した人）に対して、大学生7名がメンターとなり、2017年7月、9月、2018年2月の3回、キャリア教育の実践を行った。実践の際には、筆者および高校の先生方も同室におり、活動を見守り、必要な際はサポートを行った。

各回の実践前には、学生メンターが高校からのニーズを聴き、その内容を盛り込んだ指導案を作成した。実践当日は、学生メンター1名と高校生数名の小グループに分かれ、指導案に従って、高校と大学の違いや、将来のキャリアと大学での学びの意義などについて、学生メンターが自らの経験を語ったり、それを受けて高校生が質問をしたり、グループ内

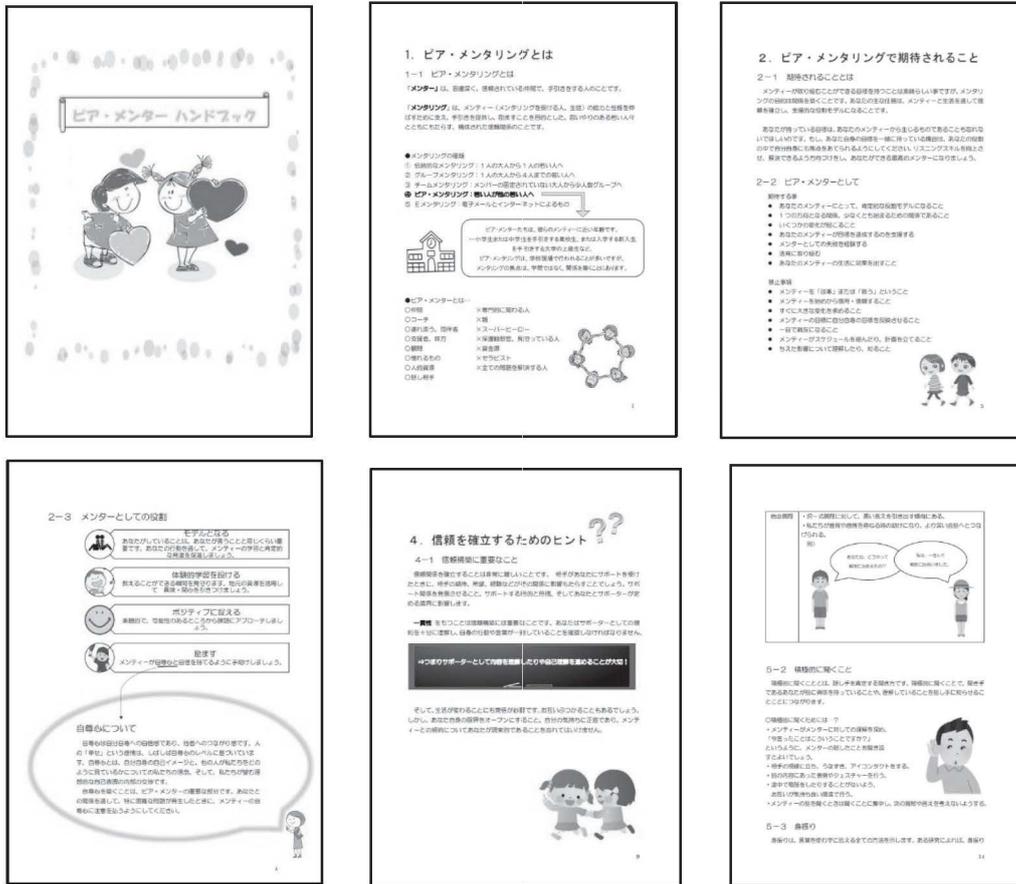


Figure 1. ピア・メンター・ハンドブック（一部）

Table 1. ピア・メンター・ハンドブックの内容

1. ピア・メンタリングとは ピア・メンタリングとは、ピア・メンタリングの目的、ピア・メンタリングで得られるもの
2. ピア・メンタリングで期待されること 期待されることとは、ピア・メンターとしての役割
3. 最高のモデルとは
4. 信頼を確立するためのヒント 信頼構築に重要なこと
5. コミュニケーションの手段 開かれた質問-閉じた質問、積極的に聞くこと、身振り、フィードバック
6. 支援 難しい問題への対応、警告サイン
7. メンタリングの活動とは メンタリングの活動、ゴールを決めること

で意見をシェアリングしたりした。

実践後は、学生メンターおよび高校生メンティに対して、質問紙調査を行い、プログラムの評価を行った。さらに、学生メンターに対して、実践の振り返りを行い、実践中の疑問や戸惑いなどについてのフォローアップも行った。

### (3) 結果

本稿では、3回の実践終了後、学生メンター7名に対して行った質問紙調査の結果の一部を以下に提示する。そして、メンターの成長に焦点を当てて考察したい。

学生メンターに、この活動を通しての自己の変化について自由記述にて回答を求めた。その結果をまとめたものが Table 2 である。

Table 2. ピア・メンタリング活動を通しての自己の変化について

<p><b>1. 信頼関係の構築に向けた主体的・自律的行動</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まずは信頼関係が大切なことなので、言葉遣いや言動、態度には気をつけた。</li> <li>・信頼関係を築くことで、悩みを相談しやすくなると思うので、信頼関係を築くにはどんな質問や態度、言動を行うべきか考え意識して取り組んだ。</li> </ul>
<p><b>2. 小グループの中で「話すこと」</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人前で話すのはまだ緊張はするが、この活動を通して、少し耐性がついたと思った。自分が笑顔でいることで話しやすい雰囲気を作れることを知ることができた。</li> <li>・初めはグループ活動で高校生に伝えたいことをうまく伝えることができず、不安を感じた部分が多くあった。しかし、メンタリングについて学びを深めたり、回数を重ねるうちに少しずつではあるが、自信を持って話すことができるようになったと感じている。</li> <li>・以前は、日常生活の中で、人前で話をしたり、意見を言ったりする時に緊張していたのだが、今ではほとんど緊張せず話ができるようになった。これは、このメンタリングの活動を経ての変化だと感じている。</li> </ul>
<p><b>3. 高校生メンティからのフィードバック</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・以前の活動中に自分が話したことを高校生が覚えていてくれたことがあり、自分の話したことが少し高校生の役に立てていることに気づき、うれしさややりがいを感じ、そこから自己肯定感を高めることができ、全体的にも自信になったと実感している。</li> </ul>
<p><b>4. 自己の経験の振り返り</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この活動を通して、自分のこれまでの生活を振り返る機会が何度もあり、自分が高校生の時にどのような経験をして、どのように感じたのか改めて思い出す事ができた。そして、自分で決めた選択がどれほど勇気がいるものなのか、自分自身ではあまり自覚できていないまま現在まで過ごしていた。が、高校生に話し、生徒の反応を見ていると、そういった経験は経験した人にしか語る事ができないので、自分のしてきた経験はとても貴重なものなのだと思う事ができた。自分にあまり自信がなかったが、高校生に話すことで少し自信を持てるようになったと感じている。</li> </ul>
<p><b>5. 実践前の準備に対する主体的・自律的活動</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動を計画して実行することに少し自信を持つことができた。</li> <li>・今まで、自ら進んで話を進めたり、まとめたりする経験がほとんどなかったが、このメンタリングの活動を通して、自分が生徒の話をまとめたり、生徒からの質問を受けて返答することにより、話す力やまとめる力が活動前より身につけてきたと感じている。</li> <li>・先を見据えて行動する力や相手が求めているものは何かを考える力がついたと思う。</li> <li>・実践前に学生メンター全員で指導案を作成する時、私は生徒の求めていることは何か考えながら取り組むようにした。</li> </ul>
<p><b>6. 文献等で得た知識を現場で実践すること</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手に物事を分かりやすく伝えること、文献などで得たピア・メンタリングについての知識を、実践を通してより理解すること、自分自身に自信を持つことなど多くの面で自分が成長をしたと思う。</li> </ul>

まず、このような活動では信頼関係が重要と考え、「信頼関係の構築に向けた主体的・自律的行動」を取るようにし、態度や言動を意識していた様子が記述から伺える。こうした中、小グループの中で、毎回異なるテーマ（前述の通り、高校と大学の違いや、将来の

キャリアと大学での学びの意義や、進学にあたっての不安など) について、学生メンターが「話すこと」を実践する。「話すこと」については、学生メンター各自が異なる思いを持っており、中には、人前で話すことに緊張や不安を感じる者もいたことがわかる。しかし、活動の回数を重ねていくにつれて、緊張への耐性がついたり、自信がついたりしていった様子が伺える。また、「自分が笑顔でいることで話しやすい雰囲気が作れる」など、気づきを得て自主的に行動化していった様子も記述から伺えた。

学生メンター全員が「自信」という語を記述していた。この「自信」は、「高校生メンティからのフィードバック」があったから生まれた面が大きいようである。例えば、「活動中に自分が話したことを高校生が覚えていてくれた」ことから、「少し高校生の役に立っている」や「うれしさややりがい」につながり、「自信」を持つに至ったという記述があった。高校生メンティからのポジティブなフィードバックは、この活動を支える大きな要因となっていることが伺える。

メンタリング活動でメンターは、必然的に「自己の経験の振り返り」を行うことが生じる。この振り返りについては、今回の学生メンターからはネガティブな記述はなかった。「経験は経験した人にしか語る事ができないので、自分のしてきた経験はとても貴重なものなのだと思う事ができた」と気づきを得る経験となったような記述や、「自分にあまり自信がなかったが、高校生に話すことで少し自信を持てるようになった」というようなポジティブな経験となった様子が伺える記述であった。さらには、「自分で決めた選択がどれほど勇気がいるものなのか」という、キャリア選択ということ自体の重みについての洞察を深めたと伺える記述もあった。この学生メンターは、その洞察を実際の活動の中で、高校生メンティを勇気づける言葉として伝えていた。

学生メンターは、実践活動前に全員で集まり、指導案作成や当日の教材作成など、「実践前の準備に対する主体的・自律的活動」を行っていた。その中で、「先を見据えて行動する力や相手が求めているものは何かを考える力」を身につけていったようである。このような自主的・自律的な活動により、小グループでの体験に差が生じたりせず、自信を持って「自分が生徒の話をもとめたり、生徒からの質問を受けて返答する」ことができたようである。こうして、「文献等で得た知識を現場で実践すること」でメンタリングについて理解が深まり、自信にもつながっていったようである。

#### (4) 考察

以上の結果より、学生メンターは、自己の成長を認識した様子が伺える結果が見られた。それは、高校生メンティからのポジティブな反応などのフィードバックの支えも、学生メンターが自信を持つことにつながる大きな要因の一つであったと言えよう。

メンタリング活動は双方向のコミュニケーションが行われる活動であり、学生メンターには、Kram のいう、心理・社会的機能、すなわちカウンセリング的なかわりを求められる。それが、「話すこと」という、メンティとのコミュニケーションにかかわる記述の多さとして表れていたと思われる。そして、これらのスキルについての十分な研修は不可欠と言えよう。また、毎回の実践後、学生メンターと振り返りの時間を作り、意見のシェアリングおよび疑問や不安の解消をするようにした。このようなフォローアップも重要と言えよう。

ピア・メンタリングの実践研究がまだあまりなされていないということには、様々な実施上の困難があるためと考えられる。メンター育成の困難さ、メンターとメンティのマッチングの難しさ、メンティのニーズに合ったプログラム内容の提供の難しさなどが本研究を通して考えられた。本稿では、前述のとおり、学生メンターの自由記述の分析だけであったため、今後は、高校生メンティの自由記述の分析、および、プログラム内容の評価分析も行い、プログラムの改良を続け、高校生メンティにとって効果的なプログラムの開発に向けて研究を続けていきたいと考える。

### 【引用文献】

- Alana James 2016 Psychology Mentoring Project Royal Holloway University of London  
浅田 匡 2007 幼稚園教育実習におけるメンタリングの機能に関する研究 教育心理学年報 46, 156-165.
- 古川亜衣美・細田泰子 2022 新人期看護師におけるメンタリング機能の検討 日本看護学教育学会誌 32-1, 13-25.
- 妹尾鮎美・三木明子 2012 看護師におけるメンタリング機能尺度の開発と信頼性・因子的妥当性の検証 日本看護研究学会雑誌 35, 55-61.
- 伊藤嘉奈子 2017 イギリスの学校臨床心理の実践と教育心理士養成について 鎌倉女子大学学術研究所報 17,1-11.
- 伊藤嘉奈子 2019 鎌倉女子大学「緑苑」 53, 142-143.
- 伊藤嘉奈子・工藤吉猛 2010 コラージュを用いたキャリア教育に関する一考察—中学生の女子におけるキャリア教育に焦点をあてて— 鎌倉女子大学紀要 17, 19-30.
- 伊藤嘉奈子・工藤吉猛 2011 女子中学生のグループワークを用いたキャリア教育に関する一考察—コラージュとキャリアマトリックスを用いて— 鎌倉女子大学紀要 18, 61-69.
- 伊藤嘉奈子・工藤吉猛 2012a コラージュを用いたキャリア教育プログラムに関する研究 鎌倉女子大学学術研究所報 12, 13-20.
- 伊藤嘉奈子・工藤吉猛 2012b 高等学校の新入生オリエンテーションにおける公正なグループ・エンカウンターの実践的研究 鎌倉女子大学紀要 19, 61-69.
- 菊池佳代 2001 看護職のキャリア発達におけるメンタリングの一考察：メンタリングとキャリア目標意識と関係を中心として 北海道大学医療技術短期大学紀要 14, 7-15.
- 久村恵子 1997 メンタリングの概念と効果に関する考察 経営行動科学 11, 81-100.
- 久村恵子 1999 経営組織におけるキャリア及び心理・社会的支援行動に関する研究 経営行動科学 13 (1), 43-152.
- 森本哲介・高橋誠 2022 教師の授業実践力とストレングススポッティングの関連およびメンターから受ける支援 兵庫教育大学学校教育学研究 35, 23-31.
- 桜井美加 2014 大学生メンターが経験する中学校におけるメンタリング—中学生の心理的—ウェルビーイングへの影響— 国士舘人文学会 4, 1-28.
- 島田希 2013 初任教师へのメンタリングにおいて複数のメンターが果たす機能と役割意識 日本教育工学会論文誌 37, 145-148.
- 田村充治・桃井龍慈 2013 地方における「キャリア教育型」高大連携の実践的研究 八

- 戸工業大学紀要 第32巻 49-66.
- 田中香津生・喜多亮介・河野理夏子・末廣和夏・洲崎溪介・高梨美佳・高橋将太・能勢千鶴 2021 対談：中高生宇宙線探求活動「探Q」でのオンライン研究サポート 科学技術コミュニケーション 29, 37-54.
- The Mentoring Partnership of Southwestern PA (TMP) 2015 Mentoring Partnership's Peer Mentor Handbook  
<https://www.mentoringpittsburgh.org/media/W1siZiIsIjIwMTcvMDkvMDYvYXpzZW5qNmwzX1BlZXJfTWVudG9yaW5nX0hhbmRib29rLnBkZiJdXQ/Peer%20Mentoring%20Handbook.pdf>
- 脇本健弘・苅宿俊文・八重樫文・望月俊男・酒井俊典・中原淳 2010 初任教师メンタリング支援システム FRICA の開発 日本教育工学会論文誌 33, 209-218.
- 渡辺かよ子 2003 青少年向けメンタリング・プログラムの構造的特徴と類型 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 3, 69-82.
- 渡辺かよ子 2016 米国における異年齢ピア・メンタリング・プログラム (Cross-Age Peer Mentoring Program, CAMP) に関する考察：新しい道徳指導法の開発可能性に向けて 愛知淑徳大学教育学研究科論集 (6), 71-81.
- 渡辺かよ子 2018 メンタリング・プログラムとプログラム評価：広島市青少年支援メンター制度の成果を中心に コミュニティ心理学研究 21-2, 128-135.

#### 【謝辞】

本プログラムの実施にあたってご協力下さった 本学高等部の生徒の皆さんと先生方、本学の学生の皆さんに心から感謝申し上げます。この研究は、皆さんのお力添えがあったからできたものであり、ゆえに皆さんとの共同研究と思っております。本当にどうもありがとうございました。